

川下の風景⑥

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【蛍】

今年は梅雨入りが早いのか、やや不安定な天気が続いた。まもなく蛍が川面を飛び交う季節になる。私は山間部に暮らすので、少し歩けば蛍が息する川べりを散歩することも出来る。地域の環境保全活動の甲斐もあって、田圃の畦道を行けば、ちらほらと蛍が飛び交う地域も増えているようだ。それでも、私が幼少期の頃に比べれば、この地域で見られる蛍の数は減少している。そもそも田園風景が住宅地が変わり、川はアスファルトの下を通るようになったので、自然風景が少なくなるのは当然だと言える。蛍を見て思い出すのは、昔、祖父に連れてもらった風景だ。今よりもずっと街灯の数も、家々の明かりもなく、真っ暗な田圃の畦道を、懐中電灯の僅かな灯りだけで歩いた。蛙の大合唱の中を行くのである。すると、いつしか辺り一面は蛍の群れ。小さな光が、あちらこちらと飛び交う姿に、幼少の記憶が比較的鮮明に残っている。宮本輝が描いた『蛍川』の世界がそこに広がっていた。

「ぼん、ぼん」と幼少の私を呼ぶ姿は、如何にも田舎の爺さんという風情だった。どんな仕事をして、どんな生活を送って来たのか、その頃は興味も関心も持たなかった。記憶にあるのは、そう、火鉢。冬の寒い日に、火鉢を共に囲んで餅を焼いてもらった。あまり多くを喋る人ではなかった。深く刻まれた皺を、更に深くして、ニコニコ笑っているような人だった。手が大きく、ガサガサで、今思えば、如何にも畑仕事をしてきた、そんな苦勞の手をしていた。よく二人でプロレスを見た。あの頃は、テレビのゴールデンタイムでプロレスをやっている、それを夢中で見ていた。父は「プロレスは、やらせだから」と笑っていたが、アントニオ猪木やタイガーマスクの雄姿を「やらせ」と否定されて、祖父に「あれは真剣やな？」と必死に同意を求める、そんな光景も覚えている。

そんな祖父も、私が中学3年の時に亡くなった。晩年は認知症を長く患い、最期は病院で亡くなった。昼夜逆転で、夜中に言葉とも叫びともつかない声で唸り、父が風呂に入れようものなら、爪を立てて抵抗していた。部屋は便の匂いで満ち、思春期真っ只中の私は寄り付くこともしなかった。介護をしていた祖母は、よく祖父を叩き、細くなった腕は痣だらけになっていたが、介護する祖母の腕も、力いっぱい握られ、引っかかれた傷が絶えなかった。葬儀の後、火葬場で骨を拾う際に、足の骨がしっかりと残されていた。それを見た父は、「歩くのが早かった。親父には付いていけなかった。京都まで歩いて行ってたもんなあ」と語った。そんな祖父の墓は、私の姉と共にある。私が生まれる前に、姉は僅か2歳で亡くなった。その墓に祖父も埋葬されるのだが、両墓制の風習があって、三味にも骨を埋めると言う。父と二人、スコップを持って墓穴を掘り、そこにも骨を埋め、盛り土をして墓石を置く。祖母の時はしなくなったが、当時はまだしていた。蝉が鳴き、蚊が飛び交うそんな季節だった。

【戦争の風景】

祖父も祖母も、戦争の話はしなかった。ただ、物は大切にした。我慢強かった。祖母は、腰が

90度に曲がっても、自分のことは自分でしていた。私の記憶では、祖父母は裕福な家庭ではなかった。田舎の出なのに、借家住まいだった。

田圃も無い。畑は借りたもの。車は無く、古びたスーパーカブが1台。土間があって、かまどで炊事をしていた。やがて、道路が出来ると言われて立ち退きになり、私たち一家と同居するようになった。小学校の頃、宿題で“昔の暮らし”を調べることになった。こういう時、祖父母と同居していると助かった。祖母は、洗濯板やモンペを持ち出して、貧しい時代の暮らしについて教えてくれた。興味や関心というより、宿題だから話を聞いていた。

私が福祉の仕事に就いた頃は、まだ明治生まれのクライアントと出会うことがあった。集団疎開や戦後の集団就職の苦労など、戦中戦後の風景に触れることがあった。

そのクライアントは、満州から引き揚げてきたという。生まれて間もない長男を胸に抱え、死に物狂いで日本に帰って来た。当時、確か100歳になっておられただろうか。歯は無いが、食べても元気、喋っても元気。両足できちんと歩いて、デイサービスに通っておられた。当時の乳飲み子であった長男夫婦と共に暮らし、高齢期の余生を楽しんでおられた。粘土細工で花を作り、いくつか持たされたことがある。「米津さん、これは枯れないからね。適当に捨ててね」と言われたが、その小ぶりの花は、未だに我が家で咲いている。デイサービスでは塗り絵や歌を楽しみ、それを自慢げに見せてくれる。いまでこそ、そういうデイサービスの機能は少なくなった。世代も変わり、ニーズも変わってきたし、制度の変化もある。それでも、このクライアントがここまで楽しめたのは、やはり苦労の時代を過ごし、今はただただ平和に日々を暮らし、食べる物にも困らない、そんな当たり前の

生活を謳歌しているからだ。

別のクライアントは沖縄で生まれた。第二次世界大戦後、南米ボリビアへ兄弟と共に渡った。ボリビアの開拓は想像以上の苦労だった。険しい山々には、思うように重機も入らず、人手で木を伐り、根をおこし、開拓を広げていった。言葉も文化も、食べ物も違う異国の地。例え兄弟と一緒にあっても、母国、故郷を離れて暮らす苦労は沢山あった。その後、彼は帰国したが、沖縄には戻らなかった。先に帰国していた兄を頼って、この地に暮らすことにしたという。沖縄生まれ、ボリビアでの生活も長く、帰国してからもその訛りがなかなか抜けず、話し言葉が聞き取りにくい。手はガサガサ、ゴツゴツ、長く日に焼けた顔が、この地の人々と異なる風貌を醸し出した。集合住宅の共有スペースに勝手に作物を植えて怒られ、部屋の窓から野菜のへたを投げ捨てて怒られ、周囲と上手く関係を築くことも無いまま老いてきた。生涯独身。いや、ボリビアに置いて来た家族があったのだろうか。あまり過去のことを語らない彼とはコミュニケーションに苦労した。デイサービスに行くと、決まった場所でいつも雑誌を読んでいる。花や作物のことが載っている雑誌らしい。人の輪には入らない。喋る言葉も少ない。それでも、決まった曜日に出掛けて行くのは、そこが居心地の良い場所なのだろう。何もしなくて退屈そうだと周囲が思っているのは勝手な解釈で、それが彼なりの社会との接点を紡ぐものだった。

私の知らない戦争の風景は、映画や書物、そして今も続く紛争や戦争のニュースだけではない。

2022.5.21 米津達也